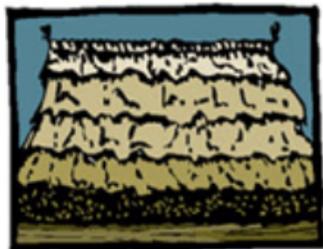


唐臼を使わぬ氏子（市島町）

鴨の尾〈かものお〉（市島町牧〈まき〉）にまつてある鴨大明神〈かみだいみょうじん〉を、梶原〈かじわら〉の地にうつして、まつることになりました。その夜のことです。たいまつを先頭に、神体〈shintai〉（神のみたまが宿っているとされているもの）をささげ持った、氏子代表〈うじこだいひょう〉の宇兵衛太夫〈うひょうえだゆう〉につづく氏子たちの列が、はき清めた道を進んでいきました。



列が、梶原への峠をこえたとき、小雨〈こさめ〉が降りだし、やがて風も吹きかけて、大雨になりました。

「これでは、ご神体がぬれる。あそこの家で、雨がやむのを待とう。」

農家をかりて、休けいすることになりました。しかし、氏子たちは、ご神体をおく場所にこまりました。神さまをうやまって、明るく、清く、正しく、すなおな、生活をしよう—こう考えている人たちですから、ご神体は、その考えにふさわしい場所におきたいのです。どうしたものか、とみんながあたりを見まわしていますと、ひとりの氏子が、叫ぶように言いました。

「そうだ、唐臼〈からうす〉のあたまがよい。唐臼のはしっこは足でふむが、あたまは決してふまないではないか。」

「なるほど、唐臼のあたまなら、けがれの無い清らかなところだ。」

ご神体は、唐臼のきねの上におかれました。やがて、雨はやみ、美しい星空が見えてきました。

これ以来、鴨社〈かものみや〉の氏子〈うじこ〉は、米をつくのに、唐臼を使わなくなったということです。

